

チョウの軌跡——長谷川三郎のイリュージョン

京都国立近代美術館では、「みる」ことを中心としてきた美術鑑賞のあり方を問い直し、「さわる」「きく」などさまざまな感覚を使うことで誰もが作品に親しみ、作品の新たな魅力を発見・共有していく「感覚をひらく」事業を行っています。2020年度からは作家 (Artist)、視覚に障害のある方 (Blind)、学芸員 (Curator) がそれぞれの専門性や感性経験を生かして協働し、所蔵作品をテーマとする新たな鑑賞プログラムを開発する「ABC プロジェクト」に取り組んでいます。

1937年、長谷川三郎は《蝶の軌跡》という抽象絵画を描きました。画面は8の字や楕円、点々や荒い筆致だけで構成されているため、どこにチョウの動いた軌跡が描かれているのかわかりません。ただ、画面のなかで何かが動いていた気配だけが漂ってきます。こうした抽象絵画から受ける目に見えない気配のような感覚は、どのように伝え合うことができるのでしょうか。

本プロジェクトでは、中村裕太 (A)、安原理恵 (B)、松山沙樹 (C) の3人が、この作品と同じ大きさのキャンバスの上で、長谷川の筆致をなぞりながら言葉を交わし、図録や美術雑誌などの文献資料を読み合わせ、さらに動物行動学からチョウの飛ぶ道を検証していきました。そして、粘土やロープ、小豆などの素材を組み合わせることで、触れることで想像力が刺激される《蝶の軌跡》の触図*を作り出していきました。

展覧会では、3人の会話や行動をもとに《蝶の軌跡》にまつわる長谷川の思索を推し量りながら制作した14種の触図を展示空間に設けます。会場を巡りながら、触図を見て、聴いて、触れることで抽象絵画の新たな鑑賞方法を探っていきます。また展示とあわせて、《蝶の軌跡》を言葉、文献資料、チョウの行動、触図からひもといいたウェブサイト「ABC コレクション・データベース Vol.3 長谷川三郎のイリュージョン」も公開しています。

* 触図 (しょくず) とは、作品の構図や色合いなどを触覚情報に変換・翻案して表した図



(左から)〈キャンバスに長谷川三郎の筆致をなぞる〉、〈長谷川三郎にまつわる文献資料を読み合わせる〉、〈動物行動学からチョウの飛ぶ道をさぐる〉、〈キャンバスに《蝶の軌跡》の触図をつくる〉すべて撮影：表恒匡

開催概要

会期 2023年10月5日(木)～12月17日(日)

会場 京都国立近代美術館 4階 コレクション・ギャラリー内

開館時間 10時～18時 ※ただし10月6日、12月15日を除く金曜日は20時まで開館(入館は閉館の30分前まで)

休館日 月曜日 ※ただし10月9日(月・祝)は開館し10日(火)は休館

観覧料 一般430円(220円)、大学生130円(70円) ※()内は20名以上の団体および夜間割引(金曜日18時以降) ※高校生以下、18歳未満および65歳以上、心身に障がいのある方とその付添者1名、母子・父子家庭の世帯員の方は無料(入館の際に証明できるものをご提示ください)

主催 京都国立近代美術館

特別協力 甲南学園長谷川三郎記念ギャラリー

助成：令和5年度文化庁 Innovate MUSEUM 事業  

中村裕太 Yuta Nakamura

1983年東京生まれ、京都在住。2011年京都精華大学博士後期課程修了。博士(芸術)。京都精華大学芸術学部准教授。〈民俗と建築にまつわる工芸〉という視点から陶磁器、タイルなどの学術研究と作品制作を行なう。近年の展示・プロジェクトに「第17回イスタンブール・ビエンナーレ」(パリ・ハン、2022年)、「眼で聴き、耳で視る | 中村裕太が手さぐる河井寛次郎」(京都国立近代美術館、2022年)、「万物資生 | 中村裕太は、資生堂と を調合する」(資生堂ギャラリー、2022年)、「ツボ _ ノ _ ナカ _ ハ _ ナンダロナ?」(京都国立近代美術館、2020年)、「in number, new world/ 四海の数」(芦屋市立美術博物館、2019年)。著書に『アウト・オブ・民藝』(共著、誠光社、2019年)。

ABC コレクション・データベース Vol.3「長谷川三郎《蝶の軌跡》のイリュージョン」

長谷川三郎《蝶の軌跡》を、ABCのメンバーが言葉、文献資料、チョウの行動、触図からひも解いたウェブサイト。

<https://www.momak.go.jp/senses/abc/hasegawa/>



お問合せ ※広報用画像については、下記へお問い合わせください

京都国立近代美術館 事業係

TEL) 075-761-4115

FAX) 075-771-5792

Email) jigyoku@ma7.momak.go.jp